

京都国立博物館の観覧料金の改定について

1 京都国立博物館（以下「京博」）は、昨年10月により開かれた持続可能な「全ての人に優しい博物館」を目指し、来館者サービスの充実などを内容とする「京都へのいざないプラン」（別紙）を発表しました。現在、京博では同プランに基づき、様々な改革に着手しています。一方、改革を推進し、貴重な文化財を確実に継承できる財政基盤整備のため、平成18年以来約14年ぶりに観覧料金を全面的に見直すことになりました。

このため、館内で慎重に検討を行った結果、本年（令和2年）4月1日をもって、以下のとおり観覧料金の改定を行うこととさせていただきましたので、お知らせいたします。

（1）現 行

【特別展】

平成知新館で年間2回程度開催されている特別展については、特別展ごとに、共催団体である新聞社等と協議して観覧料金を設定しており、現状ではおおむね、以下の通りとなっています。

・一般	1,600円
・大学生	1,200円
・高校生	700円
・中学生以下	無料

【名品ギャラリー】

いわゆる平常展については以下の観覧料金を設定しています。

・一般	520円
・シニア（満70歳以上）	無料
・大学生	260円
・高校生以下（及び18歳未満）	無料

（2）改定内容

今回の改定は、名品ギャラリーを対象に、

- ① 一般520円は、同展に要するランニング・コスト（光熱水・館内案内・環境整備・設備維持など）も考慮して、700円に改定いたします。
- ② 大学生260円は、一般の半額で、350円に改定いたします。なお、大学単位で会員になると教員・学生が無料になる「キャンパスメンバーズ制

度」は継続いたします。

- ③ シニア及び高校生以下の無料措置は、今後も継続いたします。
- ④ 団体料金（20名以上を対象に、一般410円・大学生210円）は、利用率が低迷しており、廃止いたします。

(3) 年会費をいただいている各種会員制度については、利用者への周知期間を十分に確保する必要がありますので、さらに1年後の令和3年4月を目途に新料金に移行することとし、その内容は来年3月末を目途に発表いたします。

- 2 京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財約14,000件に上る屈指の収蔵品を誇る京博は、寺社等の貴重な宝物を寄託品としてお預かりしている件数も多く、この貴重な収蔵品を次代の国民と世界の人々に継承する使命を担っています。今回の改定は、京博がこの重大な使命を将来にわたって持続的に果たすことができるよう、国（すなわち全国の国民の皆様が納める税金）による支援に加えて、来館者の皆様にも一層の御支援をお願いするものです。
- 3 なお、京博以外の東京、奈良、九州の各国立博物館についても、昨年2月または10月にそれぞれ改革プランを公表しており、京博と同様、東京国立博物館と奈良国立博物館は本年4月1日に観覧料金の改定を行います（九州国立博物館については検討中）。
- 4 以下、今回の見直しに至った国立博物館の現状と背景について御説明いたします。

国宝・重文の2割が国立博物館に

全国の国立博物館（東京、京都、奈良、九州の4館）には、長い歴史の中で収蔵してきた膨大なコレクションがあります。その数は、館蔵品が約13万件、寄託品が約12,000件に上り、今なお寄贈等によって毎年1,000件前後増え続けています。

また、これらの文化財のうち2千件余りが国宝・重要文化財に指定されており、我が国の国宝・重要文化財（美術工芸品）10,735件（平成31年（2019年）1月1日現在）の約2割が国立博物館4館に収蔵されていることとなります。

質量ともに我が国最高水準のコレクションを有する国立博物館は、国の貴重な文化財を保存・公開・活用しながら、次代の国民と世界の人々に確実に継承するという特別な使命を担っているのです。

修理の順番を待つ文化財

国立博物館が担う使命のうち「保存」とは、単に温湿度が管理された収蔵庫に文化財を保管しておけばよいというものではありません。一点一点の文化財

ごとに学術的な調査を行い、画像データを収集することに始まり、さらに劣化の状況を定期的に点検して、その結果に応じて応急修理や本格修理の優先順位を決定し、実施に移すといった、緻密で根気を要する作業の積み重ねでなっているのが、「保存」の作業の実態なのです。

現在、国立博物館では、展示のための年間約500件の応急修理と、保存のための年間100件余りの本格修理（百年に1回を目途にしています）を計画的に進めていますが、コレクションがあまりにも膨大であるがために、多くの収蔵品が修理の順番を待っている状況にあります。より多くの収蔵品の公開を実現させるとともに、次代への継承をより確実なものとするためには、修理件数をさらに拡大していく必要があります。

年間を通じて頻繁に行われる展示替え

国立博物館が担う使命のうち「公開」の中核を担っているのが、一年を通して開催されているいわゆる平常展（コレクション展）です。現在、各国立博物館では、「総合文化展」（東京）、「名品ギャラリー」（京都）、「名品展」（奈良）、「文化交流展」（九州）と命名し、「常設展」と呼んでいませんが、これは、年間を通じて頻繁に展示品の入替えを行っており、決して「常設」ではないからです。

このような頻繁な展示替えが必要なのは、日本や東洋の美術品の多くが素材的に大変脆弱で、温湿度や光などの変化に大きく影響を受けるため、素材の種類に応じて展示期間に制限を設ける必要があるからです。例えば絵巻や水墨画は、6週間展示すると、その後1年半は展示することができません。

その結果、平常展に来るたびに違う文化財に出会えるのが国立博物館の大きな魅力の一つとなっていますが、担当の研究員が直接行う展示替えの作業に要する時間と労力は、欧米の博物館では考えられないことです。

文化財の「活用」という新たな取り組み

文化財の「活用」は、子供たちや外国人も含めてすべての人々が日本の文化財に親しむ機会を拡大するための国立博物館の新しい使命です。各国立博物館では、一昨年7月に発足した文化財活用センター（国立文化財機構本部に設置）と連携して、文化財を活用した様々な体験型展示などに取り組んでいます。

例えば、テレビ番組とのコラボで美術品の複製や映像・音声を使った体験型展示（「びじゅチューン！×きゅーはく なりきり日本美術館」）、高精細複製品とプロジェクション・マッピングを用いてガラスケース無しでじっくりと鑑賞できる展示（「高精細複製品によるあたらしい屏風体験『国宝 松林図屏風』」）、高精細画像と大型の8Kモニターを使って文化財の細部を自由に拡大して鑑賞できる展示（「8Kで文化財『国宝 聖徳太子絵伝』」）などの新しいタイプの展示を展開しています。

今後も、新しい博物館体験を目指して、国立博物館の取り組みは続きます。

各国立博物館の改革プラン

昨年2月及び10月には、各国立博物館から、来館者目線に立った新時代の国立博物館を目指した改革プランがそれぞれ発表されました。

各プランでは、多言語対応の充実など世界に開かれた博物館としての取り組み、映像等を活用した展示など文化財を多面的に理解できるプログラムの提供、展示室のリニューアルなど快適な観覧環境の提供、といった様々な改革プランが提起されています。

これらのプランを受けて、現在、各国立博物館では、来館者サービスや館内環境を全面的に見直し、改善のための作業に着手したところです。

各プランの実現のための財源としては、国からの支援とともに、今回改定される来館者からの入館料収入が充てられることとなります。

来館者数の急増と収支の課題

近年、国立博物館の来館者は、劇的に変化しています。

平常展の来館者数は、10年前（平成20年（2008年）の年間約90万人から一昨年（平成30年（2018年））の年間約160万人へと急増しています。また、日本人だけでなく外国人観光客の来館者も増えており、例えば東京国立博物館では、総合文化展の有料入館者の約7割が外国人となっています。

ただ、その一方で、平常展の現在の観覧料金が、来館者一人当たりの直接的なランニング・コスト（光熱水・館内案内・環境整備・設備維持など）さえも賄えない水準にとどまっているために、結果的に「保存」等の他の使命を圧迫することにもなっています。

国立博物館が、新時代の博物館像を目指した挑戦を続けながら、本来担うべき様々な使命を十全に果たしていくためには、平常展の観覧料金の見直しが不可避な状況となっています。